

他者への働きかけの視点からみた自閉スペクトラム 症児に対する動作法の効果

瀬戸山, 悠
九州大学大学院人間環境学研究院

遠矢, 浩一
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1911221>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 8, pp.119-128, 2017-03-15. 九州大学大学院人間環境学府附属
総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

他者への働きかけの視点からみた自閉スペクトラム症児に対する動作法の効果

瀬戸山悠 九州大学大学院人間環境学研究院 / 遠矢浩一 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本稿では、他者とのやりとりに苦手さを持つトレーニーに対する心理リハビリテーションキャンプにおける動作法の適用が他者への働きかけに及ぼした影響について検討した。トレーニーは、知的発達に遅れを有し、対人緊張が強いといった特徴を持っており、他者からの働きかけに強い拒否的態度を示していたが、動作課題のなかでトレーナーに対してトレーニーへの反応を何度も繰り返し要求するような様子が見られるようになるなど他者に対する働きかけの変容がみられた。

このことについて、関わりの核となる課題を探るなかで、パター的なやりとりが成立し始め、セッションの見通しを持ち始めたのではないかと推察された。そうした関わりのなかで、“場の共有”から“動きの共有”を経て、“情動の共有”へ至り、トレーナーに任せられることへとつながったと考えられた。

キーワード：心理リハビリテーションキャンプ、自閉スペクトラム症、やりとり

I. 問題・目的

動作法は、脳性マヒで動かなかった手や腕が催眠暗示で動いたという報告（小林，1966）をきっかけに、筋電図を用いた科学的検証を経て、脳性マヒによる肢体不自由の改善を目的とした心理臨床実践を行い始めたことがその発端となっている。

この動作法は、身体の動きを媒介にして心に働きかけることから、適用の対象は知的障害児、自閉スペクトラム症児、統合失調症患者、神経症者、心身症者、高齢者、健常児やスポーツ選手などに拡大されてきた（成瀬，1995）。

適用の対象が多岐にわたるなかで、動作法の効果として、個人の気持ち、動作、感情といった様々な側面についての自己コントロールが挙げられてきた（針塚，1994）。とりわけ自閉スペクトラム症児への支援については、落ち着いて物事に取り組めるようになる、他者とのやりとりが成立するといった効果が報告され、自己コントロールや他者とのやりとりの変化の2つが主な効果として報告されてきた（藤田，2000）。

動作法は肢体不自由の改善を目的とした実践が

発端となっているが、肢体不自由を主訴としない対象者に対しては、動作そのものの改善が主なねらいではないといえる。この点について森崎（2002）は、「子どもに働きかけていくための媒介として動作課題が用いられることとなり、自閉スペクトラム症児や知的障害児における行動特性の変容がそのねらいとなる」と述べている。とりわけ、自閉的な子どもを対象とした動作法の実践報告においては、多動的な傾向が落ち着いたという報告が多くなされている。

森崎（2002）が、「落ち着く「ゆったりとした感覚」と「自己調整」感の獲得がその背景にあり、動作法を適用する際の重要なポイントである」と述べているように、身体を介したやりとりの中で、援助者に子どもがゆったりと身を任せられるようになり、「落ち着いた感じ」を体験することになることが一つのポイントであると考えられる。また、身体を介して、子どもが行動全体をゆっくりと自己調整する体験を重ねることがもう一つのポイントであると考えられる。こうしたプロセスが自閉スペクトラム症児との動作課題の実施におい

て介在していると考えられてきた。

また、清水・小田(2001)は頻繁にパニックを起こす自閉症生徒に対し動作法を適用し、パニックの減少に及ぼす動作法の効果について検討している。その結果、動作法によるリラクゼーション課題の進展に伴って、家庭及び、学校場面でのパニックの頻度が顕著に減少してきたことが報告されている。動作法において意図的に力を抜く努力ができるようになってきたこと、心身の十分なリラックス体験ができたこと、指導者との密接な関わりが快い共有・共感体験となったことが、緊張や興奮に対する自己コントロールを高める要因になったことによるものと考察された。これらのことから動作法は、パニックを頻発している事例に対する、自己コントロールを高めるための有効な援助法になりうるものと考えられる。

ここまで挙げてきたように、動作法における関わりを通して、自閉スペクトラム症児が援助者と密接に関わり、自己をコントロールしながら他者にあわせて関わるができるようになることが推察される。

しかし、自閉スペクトラム症児の他者との関わりの特徴として、重度の場合、他者からの働きかけに対する反応が乏しくなりがちであるといえる。また、自発的に他者に対して注視したり、働きかけたりすることも乏しくなりがちであると考えられる。このことには他者に対する意識が希薄であることが関係していると推測される。

石倉・眞保・高橋(2005)によると、自閉スペクトラム症児と関与者の相互的対人行動については、関与者が熟練者であると児から関与者に対しての「接触行動」や「受容行動」が多くなることが明らかにされている。また、石倉ら(2005)は、児に対して様々な働きかけを行い、関与者から関わり的手段を積極的に探っていること、児が働きかけてくる遊びには積極的に乗っていくこと、児からの働きかけには受容的に応答していくことを熟練者の自閉スペクトラム症児に対する関わり

特徴として示している。この研究からは、関与者の子どもに対する働きかけによって、子どもから関与者に対しての働きかけがより行われやすくなることが考えられる。

本稿では心理リハビリテーションキャンプにおいて他者とのやりとりで苦手さを持つトレーニーに対してトレーナーが行った関わりとそれに対するトレーニーの反応について検討し、動作法における関わりが他者への働きかけに及ぼした影響について考察することとする。

II. 事例の概要

トレーニー(以下、Tee.): 中1男児(12歳、肢体不自由特別支援学校中学部1年)

診断名: 脳原性機能障害(脳性マヒ)(1歳6か月時)、運動機能障害(X-1年)、アトピー性皮膚炎

家族構成: 父親(53)、母親(53)、本人

発達歴: 在胎41週。在胎中に心拍が低下し急遽帝王切開にて出生。出生時体重2874g。

仮死状態であったため、すぐにNICUへ入院し、2週間保育器に入っていた。

身体的な状態としては、1歳6か月の時点で、脳性マヒと診断されたものの麻痺や脱臼等は認められず、てんかん発作も見られなかった。常用的に服薬している薬物もなかった。運動発達の遅れが認められており、歩行は5歳10か月時であった。加えて言語発達についても遅れが認められていた。母親からの聞き取りによると、キャンプ初日時点での発語は、「イヤ」「いらん」の2語のみであるとのことであった。指さし行動も認められないとのことであった。

知的発達状況については、正確な知能指数は不明であるが療育手帳(A)を取得している。

X-1年までは身体障害者手帳2級を持っていたとのことであった。

訓練歴: A園(ボイタ法)(2歳~3歳)にて主に四つ這いの練習を行っていた。B病院(3歳半

から。現在は1/mの健診のみ)にてボバース法を主とする理学療法, 作業療法を行っていた。現在は, 月に1回動作法による訓練を居住地であるC県にて行っている。

主訴: 母親より「じっとできるようになってほしい」と語られた。インテーク時には, 今回のキャンプでは初めて母親とTee.の2人で外泊であり, 「いつもは父親と3人なので不安」であるということが母親から語られた。

期間および形態: 期間はX年3月28日~4月2日の5泊6日で日本リハビリテーション心理学会の認定キャンプとして行われた。動作法のセッションは1セッション50分間, 合計15セッションを筆者(日本リハビリテーション心理学会認定スーパーバイザー有資格者)がトレーナーを担当した。

Ⅲ. 事例の経過

1日目(X/03/28)

インテーク時の様子

触れられることを嫌がり, スーパーバイザー(以下, SV), トレーナー(以下, Ter.)が体に触れると体をひねって逃げる様子が見られた。声を出して嫌がるようなことは認められなかった。Tee.からTer.に体を近づけるようにして寄って来ることもあったが, Ter.がTee.の体に触れようとすると体をひねって逃げるという様子が頻回に見られた。

集団療法の時間には, おやつを歌を歌っていると突然泣き出し母親をひっかいたり, 母親の腕を噛んだりする様子や, 周りにいる他のTee.を蹴るなどの様子が見られた。Ter.はその場に居続けることがTee.にとって不快な情動を喚起するのではないかと考え, 一緒に訓練室から出ていった。訓練室そばのロビーにてソファに座って静かに過ごしていると少しずつ落ち着きを取り戻していったものの訓練室に再度入室しようとするとう泣き出す様子が見られたため, 入口から少し離れたとこ

ろで集団療法の様子を見るにとどめた。その際は落ち着いて過ごすことができていた。この出来事について母親は『この子の暴れるところを初めて見た。おとなしい子だと思っていたからびっくり』と涙を流しながら語った。

姿勢の特徴

座位姿勢: 背中に力が入りにくい様子が見られた。また, 骨盤が起きにくい様子であった。上体は安定しづらくふらふらと揺れていた。

立位姿勢: 足裏の外側で床を踏み, 腰が引けて出っ尻の状態であった。脚は外旋し, 姿勢は安定しなかった。膝は反張している様子が見られた。

歩行: 脚が外旋し, 膝が反張した状態で, 股関節を屈曲させ, ふらふらと安定しない様子であった。

見立てと方針

他機関における医学的診断としては脳性麻痺, 運動機能障害とされているものの強い筋緊張の亢進や四肢麻痺, 不随意運動は認められなかった。しかし, 運動発達の遅れが認められていたことやインテーク時の歩行が不安定であった様子から低緊張による運動不安定性を有するものと推察された。

さらに, 本児のインテーク時の状況からは新奇場面に対する強い緊張, 他者との関わりの困難さが見受けられた。また, 身体に触れられることを極端に嫌がる様子からは感覚の過敏性が疑われた。

以上の状況を踏まえ, 心理リハビリテーションという枠組みの中で, 身体を介したやりとりを通して, Ter.にTee.がゆったりと身を任せられるようになり, 「落ち着いた感じ」を体験することで, 行動を自己調整することを目指すこととした。

#1: インテーク時の様子よりTee.は他者の手で触れられることを嫌がっているのではないかと推察した。Ter.はSVと相談し, お互いの足裏を合わせることからTee.に触れることを始めてい

た。そうしたところTee.が触れられることに対して抵抗する様子が減ったように感じられ、脚の押し合いなどを行うことができた。Ter.が脚を伸ばすとTee.は脚を曲げ、Ter.が脚を曲げるとTee.が伸ばすといった様子が見られた。このようにTer.の要求にTee.が応じた際にはTer.はTee.の目を見ながら〈上手! タッチ〉と言いながら、タッチを求めた。Tee.はTer.に注目しタッチに応じる様子が認められはじめ、Ter.はTee.と目が合うようになってきたと感じた。タッチのやりとりを繰り返していると、目が合った時にTee.が顔を前に出してくる感じがあったので、Ter.も顔を前に出すとおでこ同士をつける様子が見られた。その後、Ter.に向かって手を差し出してくるのでTer.が食べるふりをするとにこっと笑顔を見せた。この行動をTer.が模倣し、Tee.に対して手を出す顔をそむけて断るような感じだったためTer.が〈悲しいよ〉と言って泣くふりをすると、笑顔を見せた。こうしたやりとりはTer.の働きかけにTee.が応じたときに繰り返された。Ter.はTee.の動きに言葉を付与するように意識し、〈おでこびたっ〉〈おいしい〉〈もぐもぐ〉〈どうぞ〉〈ありがとう〉のことばの随伴によって、Tee.の笑顔が見えてきた。

セッション終了後、触れられることを嫌がることについて母親に尋ねたところ、「小学校の時にずっとスクールバスのなかで使い古された犬の首輪で足をつながれていた。動物アレルギーやアトピーがあるのでつらかったと思うが、気づけなかった。その時から嫌がるようになったのかも。」と涙ながらに語った。

生活場面での様子：家庭では食事はいつも一人でしているが、母親が食べさせないと食べないという様子があった。普段と違う様子に母親も戸惑っているようであった。

2日目 (X/03/29)

#2 ~ #4 : #1で取り組んだようにお互いの

足裏を合わせることから関わりを始めた。Ter.が足を押し出すと押し返してくるような動きが頻回に見られた。目を合わせてタッチをして、その後出された手を食べるようなそぶりを見せ、Ter.が差し出した手を断るようなそぶりをTee.が見せTer.が泣くふりをする、という一連のやりとりをセッションの中で繰り返し行った。その後、Ter.はTee.から手を出されたときには〈ありがとう〉、Ter.が手を出すときには〈どうぞ〉とTee.の顔を見て必ず言うようにした。そうすることでやりとりが促進されるのではないかと考えた。そうしたやりとりを進めていくうちにお互いの足を合わせている時にTer.が足を震わせ、目が合った時に動きを止めるという働きかけを試すと足が止まったときにTer.の顔を見るような仕草が増えてきた。

Ter.はやりとりが成立し始めた感じを持ちTee.に対して仰臥位になるよう働きかけたが、体をひねって嫌がる様子が見られたため、足裏を合わせていくことに戻ることとした。仰臥位を急に取り入れるのではなくTee.の笑顔が出たようなときに手先に指で触れ、少しずつ手を握りTee.とTer.との間の距離を少しずつ縮めていくよう意識した。少しずつ近づいていき後ろに行くことを伝え、後ろからTer.に体を任せてもらうように働きかけ、仰臥位を促すと、臥位姿勢を取ることができた。Ter.は、Tee.が臥位姿勢をとることができたことを〈上手だね! 丸!〉とTee.に対して肯定的にフィードバックした。

仰臥位では腕上げを試みたが、Ter.がTee.の腕を支持し、まっすぐの状態を保って行おうとすると嫌がって腕に力を入れる様子が見られた。そのため腕を伸ばして上げていくということにこだわらず、腕を曲げた状態から伸ばすという動きを行って見たところTee.が少し応じる様子があった。Ter.は腕を伸ばすという動きの方向を伝える為に、Tee.の腕を持ち誘導することで動かし方をTee.に伝えるようリハーサルを行った。その後、

Tee.が自分で動かす動きが出てくるのを待つような関わりを意識した。Tee.は少しずつ仰臥位の状態を腕を天井に突き上げるような動きを示したため、Ter.はうまくできたことに焦点化して〈上手〉〈そうそう〉の声掛けを行うようにし、その際タッチをして、手を食べるようなそぶりをするという一連のやりとりを行った。

こうしたやりとりの中でTer.の働きかけに笑顔で応じる様子が見られ始めたものの、短時間で相互的なやりとりは途切れ、注意が散漫になりTer.に対して関心を向け続けることが困難であった。

#4にはTee.からTer.の膝の上に寝転ぶことがあった。

SVからは腕上げ課題の中では、「Tee.が自分のからだの動きに注意を向けられるように」ということと、「Tee.と一緒に課題をしているTer.に注意を向け、Ter.の働きかけに応じる」ことをねらいとして課題をすすめるようにと助言を受けた。また、「腕上げ課題には応じている様子が見られるため、中核的な課題にしながらも少しずつ動きのバリエーションを増やしていくことが必要である」との助言を受けた。

生活場面での様子：食事時、歌の時やTer.が席を外した時に、器をひっくり返すなどの様子が見られた。

3日目～4日目(X/03/30～X/3/31) #5～#10

Ter.から「ゴロンして」と声掛けをするとTee.自ら仰向けになって寝転がる様子が見られた。Ter.は少し驚き、やや大げさにく上手だね！すごいと伝えると、Tee.に笑顔が見られた。前日までと比べてTee.がTer.に身を任せてくる感じを強く感じた。腕上げ課題を試みると腕を伸ばした状態で上げていくことに拒否的な態度を示さず、Ter.が腕を支持し、上げていく動きについてくるような感じであった。少しずつ自発的な動きが出てくる様子も見られた。

Ter.はTee.の体に力が入っているような感じを受けていたため、力を抜いていくような課題ができないかを考えた結果、躯幹のひねり課題を提案した。その際、Tee.のペースにあわせて少しずつ課題を伝えていくよう心がけた。仰臥位の状態から側臥位になるよう促し、少しでも横向きに寝転んでいられたらよいものとした。横向きの状態からは起き上がろうとするので無理に側臥位をとらせるようなことはしないものの起き上がろうとしたときに軽く腰の辺りを止めるなどTee.のペースを見ながら少しずつこの時間を伸ばしていった。

側臥位の状態になり躯幹のひねり課題を導入すると極端に嫌がることはなかったが緊張は強く動きにくかった。体を丸めていくような緊張が入りやすいため、Ter.に身を任せて体を伸ばしていけないかと考え、坐位での背反らせ課題も導入した。

坐位姿勢ではTee.は長坐を好んでいるようであった。背そらせ課題は拒否的態度が強く体をひねらせて拒否するためその後の導入についてはこの時点では見合わせることにした。

#8からは臥位でのリラクゼーション課題に加え、インテーク時の歩行の様子から見られたTee.の立位姿勢での不安定さを扱うため、立位課題および歩行課題を導入した。Tee.の歩行の特徴として、内反足の傾向が見られ十分に足裏で踏みしめることができていないようであった。また、膝を曲げずにペタペタ歩くような特徴が認められた。立位課題の援助として、後ろからTer.がTee.の腰を援助し、〈お尻ふりふり〉と言いながら、左右に動かし、左右どちらの足においても足裏の内側でも地面を踏めるように援助した。重心移動の課題を行うと踏みしめることが困難で不安定になるようで座ろうとする様子が見られた。

生活場面での様子：会食企画では、そわそわし落ち着かない様子であったが、自分で食事をすることができていた。後半は落ち着かなくなってきたが、器をひっくり返したり大きな声を出したり

することなく Ter. と 2 人で静かに退室した。

3日目の集団療法(外出)では、楽しそうにシャボン玉をする様子が見られた。また、お楽しみ会では、最後まで参加することができ、班での出し物にも参加した。母親は『わざわざしてたり暗いところで過ごせたのは初めてでびっくり』と語った。

5日目～6日目(X/04/01～X/04/02) #11～#15

Ter. から<ゴロンして>と指示すると抵抗なく臥位姿勢をとる。躯幹のひねり課題の導入もスムーズになり少しずつ課題に取り組む時間も長くなっていった。セッションの最初は力が抜けにくく動きにくい様子を見せ、起き上がろうとするが、課題に取り組んでいくと少しずつ緊張が弛んでいき、過度に緊張している様子が減ってきているようであった。

初日から続けている Ter. と Tee. がタッチをするというやりとりを行う際、Tee. は無言で行っていたが #14 では声を出して行う様子が認められた。それは明確ではないものの Ter. が言い続けてきた「どうぞ」と「ありがとう」に聞こえられた。これはキャンプ中に見られた初めての発語であった。最終日には自ら仰臥位の姿勢を取り、Ter. に対して腕上げ課題を行うことを要求しているようにも受け取れた。

IV. 考察

本事例の経過から、動作法の場面で、Tee. が Ter. の働きかけに応じるだけでなく、Tee. から Ter. に対しての自発的な働きかけが行われるようになったと考えられた。具体的には、当初は Ter. からの働きかけに強い拒否的な態度による抵抗を示していた Tee. が、動作法における課題のなかで Ter. に対して手を差し出してそれに対する反応を求めるようなやりとりを何度も繰り返し要求するような様子が見られたことや、最終日にはキャンプ中繰り返し取り組んだ課題を行うよう

自ら姿勢をとった様子などが当てはまるのではないかと考える。

自閉症者に対する動作法の効果は、これまで、自体を自己が動かすという自己活動の観点から考察されてきた(今野, 1990)。しかしながら、自閉症者の行動変容は多動的な傾向が落ち着くなど行動をコントロールすることだけでなく、他者への注視回数や注視時間が増えたり(盛武・井村, 2003)、他者に主体的に関わっていくようになる(岩切・山中, 2010)など、他者への向き合い方にも変化が生じるものであると考えられる。

こうした他者への働きかけについて、自閉的な子どもは、しばしば他者の存在を認識する力が希薄で、他者と注意を共有することが難しいという問題がその中核にあるものとされる。しかし、動作法においては、身体を直接媒介し、援助者とやりとりすることで、他者の存在を自分との関係の中で体感し、他者と関わる実感(他者認知)を育むことが言語発達などを含めたその後の発達の基盤となっているものと考えられる(森崎, 2009)。本事例においても動作法を通して行われたやりとりが、本児の他者に対する働きかけに影響を及ぼしたのではないかと推察される。

成瀬(1985)は、動作法では、他者からの働きかけは子どものからだに具体的に行われるために無視しにくく、注意を向けざるを得ない状況を作り出すため、行わなければならない課題が明確に示されると同時に、主体的に対応していかなければならなくなる、としている。この際、援助者の意識としては森崎(2009)のいうように関わり手側が心を合わせるように能動的にその子を見つめ、自ら視線を合わせようとする姿勢を常に持って関わるような関わり手側の能動的な姿勢が求められる。

このような点を踏まえると、動作法においてはからだを通じたやりとりのなかで、一つの課題とともに取り組むことで注意を共有することが繰り返し体験され、そうした体験が他者に対する働き

かけの変容につながったものと考えられる。本事例の中では、足裏を合わせて押し合うなど他者を意識して行う行動や、課題を達成できたときにタッチをするなどのパターンのなやりとりのなかで注意を向けあうことが影響を及ぼしたのと考えられる。

本事例で挙げた Tee は知的発達の遅れが認められ、対人的な疎通性が低いことが特徴的であった。セッション前半では、身体的な過敏さに加え、見通しが持ちにくいことも影響して触れられることを拒否する様子が見られた。また、言語的なやりとりに困難さを有し、Tee が Ter. からの促しや指示を理解できず、唐突に触れられたような印象を持ち、恐怖感を抱いたのではないかと考えられた。しかし、関わりの中核となる課題を探るなかで、パターンのなやりとりが成立し始め、セッションの見通しを持ち始めたのではないかと推察された。パターンのなやりとりを行っていくなかで、大神（1993）の指摘する、“場の共有”から“動きの共有”を経て、“情動の共有”へ至ったと考えられ、Ter. に任せられることへとつながったと考えられた。このような Tee. との関わりが、Ter. に対するやりとりの変化に影響を及ぼしたと考えられた。

自閉スペクトラム症児の他者に対する認知として、森崎（2009）のいうように、動作法による身体を直接介したやりとりを通して、Tee. は自分が関わり得る存在として他者の存在を次第に認識し実感できるようになっていくものと考えられる。つまり、心を持った行為の主体としての他者存在を捉えるという意味での「対人的な表象の形成」、**「認知的構造の変容」**が、Tee. の他者に対する働きかけの変容に影響を及ぼしたのではないかと考えられた。

また、本事例における Tee. の他者に触れられることに対する拒否的な反応については、感覚の過敏性も影響しているものと考えられた。しかしながら、その背景にある Tee. の不安な気持ちに

寄り添うことが重要であると考えられた。彼のもつ不安の要因を見出し、安心に変えていくという作業が必要であると考えられる。

感覚過敏に焦点を当て本事例を考えると、とりわけ、他者に触れられることについて母親が「小学校の時にずっとスクールバスのなかで使い古された犬の首輪で足をつながれていた。動物アレルギーやアトピーがあるのでつらかったと思うが、気づけなかった。その時から嫌がるようになったのかも。」と語っていたことから、Tee. のこれまでの他者との関わりにおける経験による不安な情動の抱きやすさが背景にあったのではないかと考えられる。加えて、当初の見立てにもあるように自閉症の子どもが持つといわれる聴覚や、触覚といった感覚が人以上に敏感である（熊本，2012）という特性も影響していたであろう。

こうした母親の語りから、過去に暴力的な対応を受けたことを踏まえて Tee. の示した行動について考えてみると、他者から触れられるということが、過去の否定的体験の記憶を引き出すことにつながることもあったのではないかと推察する。

こうした経験から全般的な不安を有していた可能性が考えられる。

自閉スペクトラム症児の記憶と不安の関係について、熊本（2012）は、「引き出された記憶が嫌なものであればあるほど不安になる」と述べており、記憶を引き出すような一連の出来事が、Tee. の不安を喚起し、母親に対して噛むなどの攻撃的な行動を引き起こしたり、訓練室から飛び出そうとしたりすることにつながったのではないかと考えられた。

不安を背景に持つ Tee. に対して、侵入的になりすぎず、Tee. のもつ感覚の特徴を踏まえたうえで、Tee. の示す行動の原因やこころの様子を見つめるということを意識して関わる姿勢が援助者に対してより一層求められると思われた。Tee. の示す行動の背景を援助者が意識して関わることで、Tee. の不安を低減させる関わりが行われ、

Ter.に身を任せるという行動につながったものと思われた。その結果として、他者に対するやりとりの変化が生じたものと考えられた。

引用・参考文献

- 藤田継道 2000 動作:行動(観察可能な身体運動)と体験(内的な心理現象) 現代のエスプリ 別冊 実験行動学—身体を動かすところの仕組み—成瀬悟策(編)至文堂
- 針塚進 1994 情動活性化からみた自閉性障害児への心理臨床の展開 九州大学教育学部附属障害児臨床センター編 発達と障害の心理臨床 九州大学出版会 179-192
- 岩切祐司・山中寛 2010主体的に他者とかかわれない自閉傾向児への動作法の適応 リハビリテーション心理学研究, 37(1), 25-39.
- 石倉健二・眞保真人・高橋信幸 2005 自閉症児と関与者の相互的対人行動について 長崎国際大学論叢第5巻 213-221
- 今野義孝 1990 障害児の発達を促す動作法 学苑社
- 小林茂 1996 催眠法による脳性マヒ者の行動変容について 成瀬悟策編 教育催眠学 誠信書房
- 熊本勝重 2012 読みとけば見えてくる自閉症児の心と発達 クリエイツかもがわ
- 森崎博志 2002 自閉症児におけるコミュニケーション発達と臨床動作法 治療教育学研究 22, 41-47

森崎博志 2009 自閉症児への動作法—理論的背景と基本的な手続きについて— 治療教育学研究 29, 19-26

盛武茜・井村修 2003 自閉性障害児の模倣行動促進に及ぼす動作法の効果—腕上げ動作課題を中心として— リハビリテーション心理学研究, 31(2) 15-25

成瀬悟策 1985 動作訓練の理論と実際. 誠信書房
成瀬悟策 1995 講座・臨床動作学1 臨床動作学基礎 学苑社

大神英裕 1993 動作発達援助における同時性と共同性 九州大学教育学紀要, 38(1), 79-87.

清水謙二, 小田浩伸 2001 自閉症生徒におけるパニックの軽減に及ぼす動作法の効果:学校および家庭におけるパニックの頻度の変化(実践研究特集号) 特殊教育学研究 38(5) 1・6

付記

本稿は、日本心理臨床学会第34回秋季大会にて発表したものの一部に加筆・修正を加えたものです。会場にてご意見をいただきました諸先生方に深く感謝いたします。また、本論文をまとめるにあたり、掲載を許可していただきましたご家族の方々に心より感謝申し上げます。最後にキャンプ中にスーパーバイザーとしてご指導いただきました静岡大学、香野毅先生に心より御礼申し上げます。

**The effects of Dohsa Method in interacting others for the child
with autism spectrum disorders**

Yu SETOYAMA, Koichi TOYA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

In this report, I examined the influence of Dohsa Method's application in the psychological rehabilitation camp on a trainee's lobbying for others.

This trainee had a weak point for exchanges with others, exhibited delayed intellectual development, and tended to be tense toward others. At the beginning, he did not respond positively when others approached him.

However, during the training, he demanded reaction from the trainer at numerous occasions, which made me think that his lobbying for others has changed.

Therefore, I aimed to devise a method to determine the relation between the trainee's lobbying and Dohsa Method's application. Consequently, a pattern of exchanges was found.

In such a relation, "the joint ownership of the place" led to "affective joint ownership" after "the joint ownership of the movement." According to me, the application did influence his training.

Keywords: psychological rehabilitation camp, autism spectrum disorder, exchanges